

## ドラマセラピーの実践・研究・手法

虐待を受けた子どもへのドラマセラピー その3

尾上 明代

前号に続き、「発展的変容(Developmental Transformations)」という手法を用いて実施された、性虐待を受けた子どもとの長期セッションについて、米国のドラマセラピスト・James、Forrester、Kimの3人の研究論文(2005)から紹介する。

### 「加害者を殺したい」

2, 3ヶ月間続けた「目隠しゲーム」を突然辞めたジャマーは、あるときセラピールームの壁をじっと見つめ、「あのドアの向こうの家にいる叔父さんや両親を殺したい」と言い出した。彼の想像の中では、そこに自分がもと住んでいた家があったのだ。拳を握りしめて怒りに震えているジャマーを見たセラピストは、彼が明らかに(「発展的変容」でいう) playspace (=遊びの空間) にいないことがわかった。Johnson(2009)は、「遊びの途中で感情が激しくなりすぎたら、急速に遊びの性格が失なわれる。そしてもしも実際に危害や苦痛が発生すれば、それは全く遊びではなくなってしまふ」という。これまでも説明してきたように、遊べないもの(トラウマなど)を「遊び」に変えて実施することが、この手法の特長だ。遊べないものを遊びに、とは・・言うは易く行うは難しであるが、これこそ私自身もそれを具現化するべく心血を注いでいることである。

ジャマーの様子を察知したセラピストは、彼に「君は、まだ叔父さんや両親に立ち向かう準備はできてないと思うよ」と伝えた。ジャマーが、壁の向こうを「加害者たちの家」だと言い出したことは、ジャマーの創造性が発揮され、プロセスとしても機が熟して来たことは間違いない。長いプロセスを歩んできて、とうとう加害者と直面するセラピーの核心場面が訪れようとしている。しかしセラピストは慎重である。そしてまたもやクリエイティブな仕掛けとして想像上の「鍵」を生み出した。そしてそれを手に高くもち、「心の準備ができるまで、家のドアを開ける鍵を、君が届かないようにここに持っているね」と言

ったのだ。まさにセラピーの成否を決める「鍵」だったと思う。ジャマーは笑い初め「準備できてるよ！」と言いながら、その鍵をとろうと手を延ばした。セラピストはジャマーが届かないようにプレイフルに鍵を動かす。その鍵の取りっこ遊びに1セッションを費やした。ジャマーはそれが楽しくなりセッションの終わりには、彼の心身は元の playspace に戻っていたと言う。

## 弱い自分を認めて癒される

次のセッションでは、セラピストが「君がもしあのドアを開けたら悲しくて泣いてしまうことになるかもしれないよ」と警告したが、ジャマーは構わないよ、と懸命に鍵を取ろうとし、セラピストはとうとう開けることに同意した。2人は力を合わせて、やっとの思いでドアを開ける。すると、そこにはものすごい風が吹いていて、セラピストがドアの向こうに吸い込まれて行きそうになった。ジャマーはセラピストを掴み、セラピストを取られまいと一生懸命引っ張った。ジャマーとセラピストは何度もその大風と戦った。すると爆発が起こり、彼の叔父と両親が家の中から出てきてジャマーとセラピストに攻撃をし始めた。2人は勇敢に加害者たちと戦った結果、今回はジャマーが負傷してしまった。矢が飛んできて「僕のハート」を突き刺したというのだ。セラピー開始当初からジャマーは、加害者と同一化し常に強いキャラクターを演じ続けていた。その後、負傷したセラピストをケアするプロセスを経た今、初めて自身が傷つく役を演じることができるようになった瞬間だった。弱い自分にアクセスし、さらには魔法使いになったセラピストが傷の手当てをすることを、初めて許したのである。セラピーが終盤に近付いていることが感じられる。その魔法使いは安全な洞穴に住んでおり、とてもパワフルな魔法を使うことができた。魔法使いはジャマーの傷に包帯を巻き、ジャマー自身の力が出てくる「栄養」を与えた。ドラマの筋としては身体的な傷であり、セラピストも物理的アクションによって手当てをしたわけだが、本人も「僕のハート」と言っている通り、当然ながら彼の心の傷を癒しているのだ。それを非常に象徴的な現実的な行為を通してやっているのだ、セラピストのケアは可視化され、子どもはそれを文字通り身体一杯、心一杯に受け取ったであろうことがよくわかる。私自身も、子どもとのセラピーでは、よくこのようなことをしていた。例えば、身体が痛いと言う子どもにマッサージをする。しかしその時、実際の身体の痛みはないのであるが、私のマッサージによりケアは可視化され、身体性を伴う現実のものと感じられ、子どもは非常に満足するのだ。

この戦いのセッションで、あるときジャマーがセラピストの膝によじ登ってきた。セラピストが Warrior song (戦士の歌) を歌うとジャマーは静かに泣き

始めたそうだ。この光景を想像してみると、あたかも母親に愛と慰めを求めている子どものように感じられる。子守歌が似合うような場面を想像する。しかしセラピストが歌ったのは、戦士の歌であった。(この歌は士気を高めるためのアメリカ版軍歌であり、戦争を肯定しているこのような歌を子どもに歌うことに私は異を唱えたい。この歌は、戦争で殺す側の論理だ。また男性の暴力の被害者であるジャマーに、それを肯定する歌を歌ったことになる。しかしこのセラピストは、ジャマーが虐待、その後の苦しい状況やトラウマと「戦って」きたことを称えたいがために、この歌を選んだのだろう。そして歌の途中から歌詞を替え歌にして、実際のジャマーの人生を歌った。この転換によって、歌はジャマー自身の歌になった。) ジャマーが泣き始めた理由は、「僕、よく頑張ったよね」という自分自身への共感から万感が胸に迫ってきたからではないだろうか。そして替え歌を聞いたジャマーは大泣きしたそうだ。失われた子ども時代への涙だ。泣きながら、彼は自分のライフストーリーをしっかりと聴いた。そしてその泣き方はゆっくりと静かになり、息遣いも穏やかに規則正しくなっていたという。そこで「魔法使い」はジャマーに3つの「想像上の贈り物」をあげた。「性虐待を癒す飲み薬」、「彼の人生の物語が書かれた本」、そして「彼の未来を守る刀」。もちろんジャマーは喜んで受け取った。

結局、この戦いのセッションは、ジャマーが「怪物たち」に勝ったと思えるまで、2、3ヶ月続けられた。設定は架空のドラマ、場所はセラピールームであるにもかかわらず、ジャマーがセラピストと同盟を組み、加害者と戦ってやっつけたことはまぎれもない事実(=体験)である。ジャマーが「戦って勝利する」ことが「現実に」できたのは、このセラピーが身体性を伴うドラマを使っているゆえである。

ほどなくしてジャマーは、里親・シャーリーの申し出を受け、正式な養子になることに同意した。彼は新しい苗字を使うことを自分で選択した。シャーリーは、引っ越しも決めた。

## 家族になる儀式

ジャマーとセラピストはさよならを言う準備を始めた。そこで、セラピーの終結のプロセスとして儀式を行うことにした。結婚式やお葬式など、人生における重要な節目に大きな役を果たす儀式は、実はドラマセラピーの最終段階に組み込まれているものであるが、本当に参列者を招いて本当の儀式を実施するというこのアイディアは素晴らしい。

セラピストは、ジャマーのこれまでの人生のストーリーを招待された親しい

観客たちに語った。彼らが見守る中、シャーリーとジャマーは、「あなたを私の息子とします」「あなたを私の母とします」という誓いのことばを交わし、正式に親子になった。立会人たちは「私たちはあなたの物語を聞きました。あなたはよくやりましたね。私たちは、この新しい家族の門出にあたり、証人となります」と唱和した。多くの涙が流され、そしてケーキがふるまわれたという。何と素敵なセレモニーだろうか。ジャマーの心に一生の思い出として残ったことだろう。

セレモニーの2ヶ月後、ジャマーとセラピストは、これまで使ってきた想像上のおもちゃや思い出が詰まった「マジックボックス」を開けて最後のセッションをした。そして20年後はどんな風になっているかを想像した。セラピストは杖をついて歩いており、ジャマーは自分の子どもたちを連れて彼を訪れていた。2人は2年間のセッション中に出てきたキャラクターや、ゲーム、戦い全てを復習した。最後にもう一度ということで、例の目隠しゲームもやった。そしてお互いに想像上の贈り物として、刀、トロフィー、メダル、物語の本などを交換した。ジャマーは一つだけ、本物のパペットをもらった。悪夢にうなされていた初期のころ、大丈夫だよと自分に語りかける練習に使ったパペットに違いない。今後の人生で、ジャマーの支えの一つとなるであろう具体的な思い出の品として、これをプレゼントするという判断も適切だと思う。セッションの最後に2人はハグをしてさよならを言った。セラピストは自分の心の中には永遠にジャマーがいることを知っていた。そしてジャマーの心の中にも自分がいてくれればと願った。セラピストはジャマーが成長してもずっと心の中に、自分自身を助ける人や怪物たちがいる playspace を持ち続けてくれればと願った。

この事例は何度読んでも感動する。人生の初めに起きたあまりにも辛いできごとを乗り越える子どもの可能性と力、このドラマセラピストの創造的で辛抱強い仕事、この手法の大きな威力、そして自分自身のケースで出会った子どもたちへ同時に思いを馳せるからだと思う。

(終わり)

文献：

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.